

教職専門実習Ⅱを振り返って

～自宅実習での学びと今後の課題について～

実務家教員

新谷 幸三

1. はじめに

この専門実習Ⅱでは京都市立中学校4校に配属された9名の院生を担当していたが、緊急事態宣言が発令され、中学校では4月6日から4日間だけの現場実習になり、それ以降は自宅実習に切り替わることになった。そのようなコロナ禍の自宅実習期間中に何を視点に置き、取組みを進めたかその様子と専門実習を通して見えてきた課題をまとめていくことにする。

2. 教職専門実習Ⅱの取組み

「緊急事態宣言」が発令されてからの動きは、どの実習校でもほぼ等しく自宅での実習になり、基本的には実習校から任された仕事をこなすことを優先し、その上に大学からの課題や個人で設定した課題を取り組み、進めていった。実際に学校からの仕事については、休校明けを想定した指導案作りや、休校中の生徒に向けた家庭学習課題作りが主であった。

そして、実習日誌についてもその記録を毎日詳細に記すこととした。

また、週1度の合同省察会については、初回だけはメールのやり取りのみで終わったが、2週目からはズームを使い、顔を見ながらのやり取りができるようになった。そのディスカッションはこの事態の中で教育の意味を様々な角度から考える我々にとっての良い機会となった。

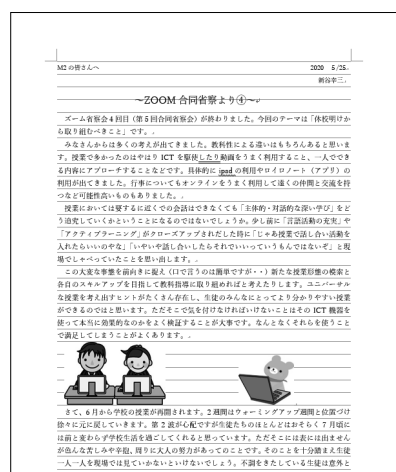
毎回時間の制約があり、伝えたいことが枠には収まらず、後から「便り」にまとめてこちらから発信するようにもした。院生の考えやその時々状況を見ながらではあったが合同省察会を通してのねらいを最初に大きく3つ決めた後、そこから更にゼミ生同士で今考えるべきテーマを絞り、議論することができた。以下がその具体的な内容になる。

ねらい

- ①情報の共有
- ②いつ学校が再開しても働ける準備
- ③広い視野で教育をとらえる

討議テーマ

- 1、現状に則した授業展開や生徒指導について
- 2、休校中の学習課題等について
- 3、9月入試制度について賛成か反対か
- 4、休校明けから取り組むべきこと



この3つのねらいについてだが、①はお互いの不安解消、②はいつ何時学校が再開されてもすぐに現場で働けるようにモチベーションを少しでも院生が維持し続けられ、現場との思いの温度差が無いよう学校の取組などの情報を共有し、確認した。

この時に各学校から発信されているホームページには普段以上に詳しく先生方の学校再開へ向けた取組みや生徒への学習・生活のアドバイス。そして、心温まるメッセージなどがアップされており、大変役に立つものが多く、学ぶことも多くあった。

そして、③は視野が狭くなり、マイナス思考がどんどん増幅していくような状況になった時の不安ややり場のない怒りを自分自身で客観視し、冷静さを保ってほしい願いである。

実際の討議については予想以上の良いアイデアが出てきた。特にコロナ禍における今後の授業や行事などは、実際に現場でも活用できる内容のものも多くあり、中でも「リモート修学旅行の提案」は文化や風習の学びにも繋がるユニークで評価できるものであった。討議を通して院生の学びの継続がしっかり感じられ、みな同様に「今やれることを頑張るしかない」という言葉を発し、現実と向き合う姿勢を見ることができ、頼もしく感じた。

3. 今後の課題

「高度な専門性を備えた教師の育成」が教職大学院の使命であると捉えれば、その専門実習の役割は重要である。また、その目標が理論と実践を融合させ総合的な教育実践力をつけることや学校の教育課題を検証し、教職の専門性を高めること、様々な職務遂行の在り方を体得することである。この大きなテーマが果たしているかを、常に大学院、連携校、そして院生の三者が意識し、同じ思いで取り組んでいるかが重要な点である。

それを考えると今後も作り上げていくべき形があるように思う。以前から議論されているが、教育実習とはその意味合いが異なる専門実習の共通理解の必要性を感じている。我々は学校現場に教師教育に対する考えや思いをわかりやすく伝えることが継続して必要で、それと同時に現場の学校理解を推進していきたい。学校現場も、現在の教育課題である若手教員育成の視点から学校全体でこの専門実習を捉え、多様な教育課題の共同研究や自校に還元する教師教育の視座を持てればと考える。そして何よりも一番大切なのは院生である。学校現場に大学院の強い意思を伝える術は、しっかり学んだ院生を見てもらうことが近道ではないだろうか。その院生が現場ではつらつと活躍すればさらに認知が広がり学校現場の意識も変革し、任される業務もより専門的になるであろう。そのために我々大学教員もその思いを院生に託しつつ、できる限り最高の教育を展開し続けていくべきである。少々不器用でも教師の使命をしっかりと自覚し、瞳に輝きのある院生を送り出したいと考えている。

実務家としてその責務は非常に大きいと捉え、自らの課題と認識している。よく教育に答えは無いと言われるが、目指すイメージは持っている。歩みはゆっくりでも確実に前に進みたい。